
リセット

しみちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リセット

【Nコード】

N9030D

【作者名】

しみちゃん

【あらすじ】

人生をリセットしたい。優はそう思ってゲームのリセットボタンを押した。そして、彼女の人生は変わった。

人生がリセット出来たら、どんなに良いだろう。
誰もが、考えるだろう。

そんな事を一生で、一体何度考えるだろう？
人生なんて、後悔だらけなのだから。

「建！ゲーム片付けなっ！」

「優が片付けといて〜！」

『建』とは、私の弟だ。『優』は私の名前。

建はそう言って、家を出て行った。

（自分が出した物くらい自分で片付けろよな…。）

そう思いながら、建の出したゲームを片付ける。

（しかも、点けっぱなしかよ…。）

呆れながら電源を切ろうとする。

その時、目に留まった『リセット』と書かれたボタン。

人生がリセット出来たら良いのに…。

そう思って、私はリセットを押した。

電源を切ると私はある異変に気が付いた。
部屋が、いつもと違う。

そして、あの子が居た…。

「優ちゃん！」

「有希ちゃん…。」

どうして、どうして、有希ちゃんが居るの？
有希ちゃんは…私が、殺したのに…。

―10年前―

私が7歳の時だった。

私と有希ちゃんは、友達だった。

とても晴れた日だった。

私と有希ちゃんは外で遊んでいた。

「有希ちゃん、ボール投げるよお！」

「うん!!」

私はボールを投げた。

有希ちゃんはそのボールを取ろうとした。

でも、ボールは有希ちゃんの意味とは裏腹に、茂みに転がっていった。

「ごめん!! 私取って来るから、優ちゃん待ってて!!」

そう言って有希ちゃんはボールを取りに茂みへ入っていった。

私は待ってた。

ずっと待ってた。

けれど、有希ちゃんは帰って来なかった。

心配になった私は、有希ちゃんを探しに茂みへ入って行った。

暫く歩くと、有希ちゃんが履いてた赤い靴が落ちていた。

そして、有希ちゃんの死体を見つけた。

有希ちゃんの死は、事故として片付けられた。

あの日、私がボールを取りに行っていれば…

あの日、私がボールを投げなければ…
私が、有希ちゃんと関わらなければ…
有希ちゃんは死ななかった…。
私が…有希ちゃんを殺したんだ…。

「何で…何で居るの…？」

有希ちゃんは、あの日と変わらず、あどけない顔をしていた。
ふと、自分を見る。

すると、私もあの日と同じ姿に変わっていた。

(何で…？)

「優ちゃん、どうしたの？」

「有希ちゃん…死んだんじゃ…。」

「何言ってるの？死んでないよ！それより外、行こう？」
ボールを差し出して、有希ちゃんは笑いながら言った。

あの日と同じだった。

有希ちゃんが死んだ日と。

何もかもが、全く同じだった。

このまま外に行ったら、有希ちゃんは死んでしまう…。
だから、私は言った。

「私、外行きたくない。」

過去を変える為に。

有希ちゃんを死なせない為に。

「ええ…何で？」

「…今日、ちょっと気分が悪いから。」

とっさに嘘を吐いた。

「大丈夫？」

「うん大丈夫。今日は家で遊ぼう。」

「うん！」

とても、とても懐かしかった。
ずっとこの時間が、続けば良いと思った。

「優ちゃん、私そろそろ帰るね。」

窓の外は日も沈みかけ、辺りが翳り出している。

「うん。バイバイ！」

「また明日学校でね！！」

そう言って有希ちゃんは帰っていった。

突然、睡魔が私を襲った。

意識が朦朧とし、目を閉じた。

暫くして、目が覚めた。

窓の外が、微かに明るんでいる。

（朝…？）

周りを見渡すと、そこは私の部屋だった。

鏡を見ると、いつもの私。

（さっきのは…夢？）

手元にある携帯を手にする。

AM 7..20 5/13（月）

そっか、夢だったんだ…。

落胆した。

有希ちゃんは、死んだままなんだね…。

（学校：行かなきゃ…。）

のそのそと仕度をする。

一回から、母の呼ぶ声がする。

「優！早くしなさい。有希ちゃんが来てるわよ！！」

（え…母さん、今何て…！？）

階段を下り、急いで外に出る。

玄関には、少し大きくなったものの、まだあどけなさを残した有希ちゃんが立っていた。

「有希ちゃん！！」

私は有希ちゃんに抱きついた。

「ちよっと、優！どうしたの？寝ぼけてるの？」

有希ちゃんが生きていた。

それがとても嬉しかった。

泣きそうになった。

私達是他愛も無い話をしながら学校へ行った。

教室の光景はいつもと変わらなかった。

ただ、有希ちゃんが存在が増えただけ。

ふと疑問に思った。

そういえば、有希ちゃんは死んだはずだった。

私は昨日過去に居た。

有希ちゃんを引き止める事で、未来が変わった。

私が過去に居たきっかけは…？

記憶を辿る。

…リセットボタン…？

もしかして…あのボタンを押したから…？

チャイムが鳴り、授業が始まる。

今日は、この間の小テストが返って来た。

100点満点中…58点…。

クラスの平均以下だった。

(ちゃんと勉強すれば良かった…)

…リセットを…押せば良い。

もしかしたら…また過去にいけるかも。

急いで家に帰った。

ゲームを引き出して、リセットボタンを押す。

気が付くと、部屋に居た。

携帯に目をやる。

P M 5 .. 3 0 5 / 6 (月)

一週間前、つまりテストがあると知らされた当日に居た。
勉強した。

ふと考えた。

『一日経つと…また、現実に戻るんじゃないか?』と。

P M 1 1 .. 5 0

突然の睡魔が私を襲う事は無かった。

しかし、ずっと起きており、眠い事には変わらない。

布団に入り、眠った。

朝、起きる。

携帯を開くと A M 7 .. 2 0 5 / 7 (火)

現実に戻る事は無かった。

何時もの様に学校に行く。

勉強した成果があったのか、テストの出来は良かったと思う。

そして、また突然の睡魔が私を襲った。

気が付くと教室に居た。

黒板には『5／13』の日付。

私の手には、100点のテスト。

辺りは既に暗く、私は急いで帰った。

これで、解かった事がある。

それは、後悔がないと過去に戻れない事。

後悔が無くなれば、現実に戻る事だった。

つまり、やり直したい事がいつでもやり直せる。

その日を境に私は変わった。

やりたくない事を、何もやらなくなった。

一学期も終わり、終業式当日となった。

通知表が帰って来る。

成績はとても酷く、目も当てられぬ物だった。

ほとんど、1と2。

良くても精々3だった。

原因は、課題の未提出。

テストの赤点。

忘れ物。

授業をサボる、など、数え切れない位あった。

私は家に帰ると、急いでゲームを引き出した。
そしてリセットボタンを押した。

私は期末テストの初日に居た。

一度解いて、解説も聞いた問題。
簡単だった。

2日目も、3日目も、テストは楽勝だった。

そして、睡魔に襲われ、気が付くと、終業式の日の学校。
つまり現実に戻っていた。

同じ一日をもう一度繰り返す。

でも一つだけ違う所、それは成績がうんと良いものになっている
事だった。

そして、夏休みになった。

私は課題もせずに、毎日友達と遊んだ。

そのおかげで、夏休みが半分終わる頃には、お小遣いも底を尽きて
いた。

そして、ある日、友達の薫に買い物に誘われた。

行きたいが、金がない。

そういったら、薫はこう言った。

『私だって、今月ピンチだし。万引きするんだよ!』と…。

面白そうだ。

そう思い、私は薫と駅前のデパートへ行き、その中の本屋へ入って
行った。

「周りに監視カメラがないか、よく調べるんだよ。」

薫は小声で言った。

そして、私達は欲しい本や漫画を手し、カメラが無く、人の少ない所へ行き、自分の鞆へ本を隠した。

そして、何も無かった様に、歩いて本屋を出た。
バレないか、と、とても不安だった。

万引きはバレなかった。

誰にも見られていなかった。

私は、万引きをした時のスリルが忘れられなかった。

そして、私は万引きを繰り返す様になった。

夏休み中、毎日のように、薫と万引きをした。

偶には一人で、偶には薫の友達数人と共に、万引きを繰り返した。
ある人が見ていた事を知らずに…。

夏休みが終わる頃には、万引きを止められなくなっていた。

明日から学校が始まる。

けれど課題が全然終わっていない。

唯一やっていた物と行っても読書感想文位だ。

私は、またゲームを引き出し、リセットを押した。

私は、夏休みの初日に居た。

私は急いで課題をした。

一日に一つの課題を片付ける事をメドに、課題をこなして行く。
そして、二週間後には、課題は全て終わった。

睡魔に襲われ、眠りを経て、現実に戻って来た。

机の上にあった課題は、全て終わっていた。

学校が始まった。

一学期中、私は殆んど有希ちゃんと一緒に毎日を過ごしていた。でも、最近はずっと、薫達と行動している。

ある日、私は放課後、有希ちゃんに会った。

「優ちゃん…。」

「何？」

私は急いでいた為、少しいらだちながら答えた。

「あのね…私、見ちゃったんだ。優ちゃんが万引きしてる場所…。」

驚いた。

誰も見ていないと思っていた。

有希ちゃんが見ていたなんて、知るよしもなかった。

有希ちゃんが私の肩を掴んで言った。

「ねえ、薫ちゃん達と行動するの、止めなよ。優ちゃんがダメになっちゃう！」

「…るさい…。」

「え…？」

「うるさいって言ってんの！あんたに関係あんのかよ！！」

そういつて私は有希ちゃんを突き飛ばし、走った。

「優ちゃん…。」

有希ちゃんは悲しそうな顔をし、その場で泣き崩れた。

私はすぐに家に帰らなかった。
イライラする。

私はイラつきを解消しようと、万引きをする為に近くの雑貨屋に入った。

一番近くにあった、小さな石の付いた指輪を手握り締め、急いで店を出た。

「君、商品の会計を済ましてないよね？」

後ろから声がした。

逃げようとしたけど、手を掴まれ、逃げられなかった。

その後、警察を呼ばれ、母さんが迎えに来た。
帰る途中、何も話さなかった。

家に帰ると、父さんに頬を打たれた。

「お前は何をしたかわかっているのか！？お前は我が家の恥だ！！」
と。

『反省しろ』と部屋に入れられ、外側から鍵を掛けられた。
罪悪感など、何も無かった。

只々、イライラが募るばかりだった。

朝になると、戸は開くようになっていた。

誰とも顔を合わせたくなかった。

だから、ギリギリの時間に家を出た。

学校に行く途中、有希ちゃんを見た。

何か言いたげだったけど、無視した。

学校に着き、昇降口で靴を履き替える。

でも、上靴が無かった。

仕方が無いから、職員室でスリッパを借りた。

教室に向かう途中、すれ違う生徒から、一々忍び笑いが聞こえる。遠くの生徒は、指を指し、ヒソヒソと話をしている。

教室の前に立った。

ざわざわと騒がしい教室。

私は扉を開いた。

突然、教室がシンと静かになった。

不思議に思いながら、自分の席に行く。

私の机上には、『泥棒』『死ね』『最低』などの罵詈雑言が飛び交っていた。

皆、私を見てクスクスと笑っている。

一人の子が後ろから、私に言った。

「万引きなんて最低だね、死ねば？」と。
クラスに忍び笑いが満ちた。

とても、とても耐えがたかった。

私は荷物を置くとトイレに入った。

万引きしてた事…ばれたんだ。

数人の足音と、話声が聞こえた。

話声の中に、薫の声があった。

突然、頭上から水が降って来た。

何が起きたか解からなかった。

理解できた頃には、始業のチャイムが鳴っていた。

私は屋上へ行った。

あの水は、薫達がやったんだ…。
声押し殺し、泣いた。

友達だと思っていたのに…。

泣きつかれて眠っていたのか、起きた頃には日は沈んでいた。

私は、教室に入り、鞆を取って、家へ帰った。

家には、まだ、誰も帰ってなかった。

私は、ゲームを引き出した。

もし、あの時、万引きしていなかったら、薫達とは友達で居れたかな…？

リセットを押した。

私の前には有希ちゃんが居た。

「ねえ、薫ちゃん達と行動するの、止めなよ。優ちゃんがダメになっちゃう！」

昨日と一緒だった。

『うん。』と言おうとした。

しかし、それとは裏腹に、口にした言葉は、あの日と同じだった。

「…るさい…。」

「え？」

「うるさいって言うてんの！あんたに何が解かるんだよ！！」と…。

そして、気が付くと私は、有希ちゃんを突き飛ばしていた。

必然的に、有希ちゃんは車道に倒れこんだ。

車が有希ちゃんを目掛け、走ってくる。

車は、急には止まらない。

人も、急には反応することは出来ない。

有希ちゃんは、車に轢かれた。

「有希ちゃんっ！！！！！！」

有希ちゃんに駆け寄った。

有希ちゃんは、まだ意識があった。

「有希ちゃん!!」

「…優ちゃん…、私…優ちゃんに…言いた…い事が…あ…るん…だ…。」

「何…?」

「私を…生かせ…て…くれ…て…あり…がとう…。未来を…変えてくれ…て…ありが…とう…。」

有希ちゃんは、私が過去に行って未来を変えた事を知っていた。

「有希ちゃん…。」

「優ちゃん。楽し…かった…よ…。バイバイ…。」

その言葉を最期に、有希ちゃんは死んだ。

私が殺してしまったんだ。

幼かったあの日より、とても残酷な方法で…。

私は走って家に帰った。

急いでゲームを出し、リセットを押す。

しかし、何も起こらない。

「何で!?!何でなの!?!?」

何度も、何度も、リセットを押す。

でも、何も起こらなかった。

泣いた。

そして、悔いた。

有希ちゃんを突き飛ばした事を。

あの日、有希ちゃんの言葉に、素直に耳を傾けなかった事を。
万引きをした事を。

『やり直せるから』と、軽はずみにした全ての悪行を。

有希ちゃん…。

私が有希ちゃんを殺したという過去から、現実に戻る事は無かった。

有希ちゃんが死んだ次の日。

その日は、私はあからさまに分かるいじめに逢った日。

でも、変わった。

私はいじめに逢う事は無かった。

確かに、願いは叶った。

最悪の形で。

薫とは、十年たった今でも仲は良い。

今でも時々、やり直せるんじゃないかと、リセットを押す事がある。

でもやっぱり何も、変わらない。

ある日、私の元に手紙が届いた。

手紙を開く。

手紙は、ありえない人物からだった。

有希ちゃんからだった。

手紙の下に書いた日付は十年前の物だった。

――優ちゃんへ――

優ちゃんがこの手紙を読んでもるのは、私が死んだって事だね。

私ね、知ってたんだ。

十年前、私が本当は死ぬこと。

けど、優ちゃんがその未来を変えてくれた事。

何で知ってるかは…教えてあげない！

私だけの秘密だから。
優ちゃん、ありがとう。

私は、優ちゃんに正しい道を生きて欲しい。
だから、言います。

万引きは止めようね。

そして、薫ちゃんも正しい道を歩ませてあげてください。
無神経で、おせっかいかもしれないけど、
これが、私の精一杯の恩返し(?)です。

優ちゃんは、ちゃんと生きてね。

私が死んでも、真っ直ぐに生きてね。

優ちゃんはいつまでも親友だよ！

大好き！！

最期に、もう一度…

私を生かしてくれて、ありがとう。

H. 16 9月16日

小さな文字でそう綴られてあった。

私は、静かに涙を流した。

「ありがとうって言うのは…私の方だよ…。」

有希ちゃんは、いつでも私の事を考えてくれてたんだね。

私、有希ちゃんに何もしてあげられなかったよ…。

有希ちゃん、私は今、正しい道を歩んでいるかな？

真っ直ぐに生きているかな？

有希ちゃん、大好きだよ。

私は、ちゃんと前を向いて生きて行くから…。
ありがとう、有希ちゃん。

（後書き）

グダグダかもしれませんが、今までで一番出来の良い作品を書けた
と思います。

ここまで読んでくださってありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030d/>

リセット

2010年10月8日21時43分発行